

IV 授業と生徒指導の一体化と 集団づくりの視点

- 1 授業と生徒指導の一体化
- 2 集団づくりの視点 ～学級の支持的風土～

1 授業と生徒指導の一体化

『生徒指導提要（改訂版）2022』では、生徒指導の定義と目的が明記されました。

【生徒指導の定義】

生徒指導とは、児童生徒が、社会の中で自分らしく生きることができる存在へと、自発的・主体的に成長や発達する過程を支える教育活動のことである。なお、生徒指導上の課題に対応するために、必要に応じて指導や援助を行う。

【生徒指導の目的】

生徒指導は、児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支えると同時に、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支えることを目的とする。

生徒指導においては、

子どもの自己実現に向かって
‘させる生徒指導’より ‘ささえる生徒指導’

が基本となります。

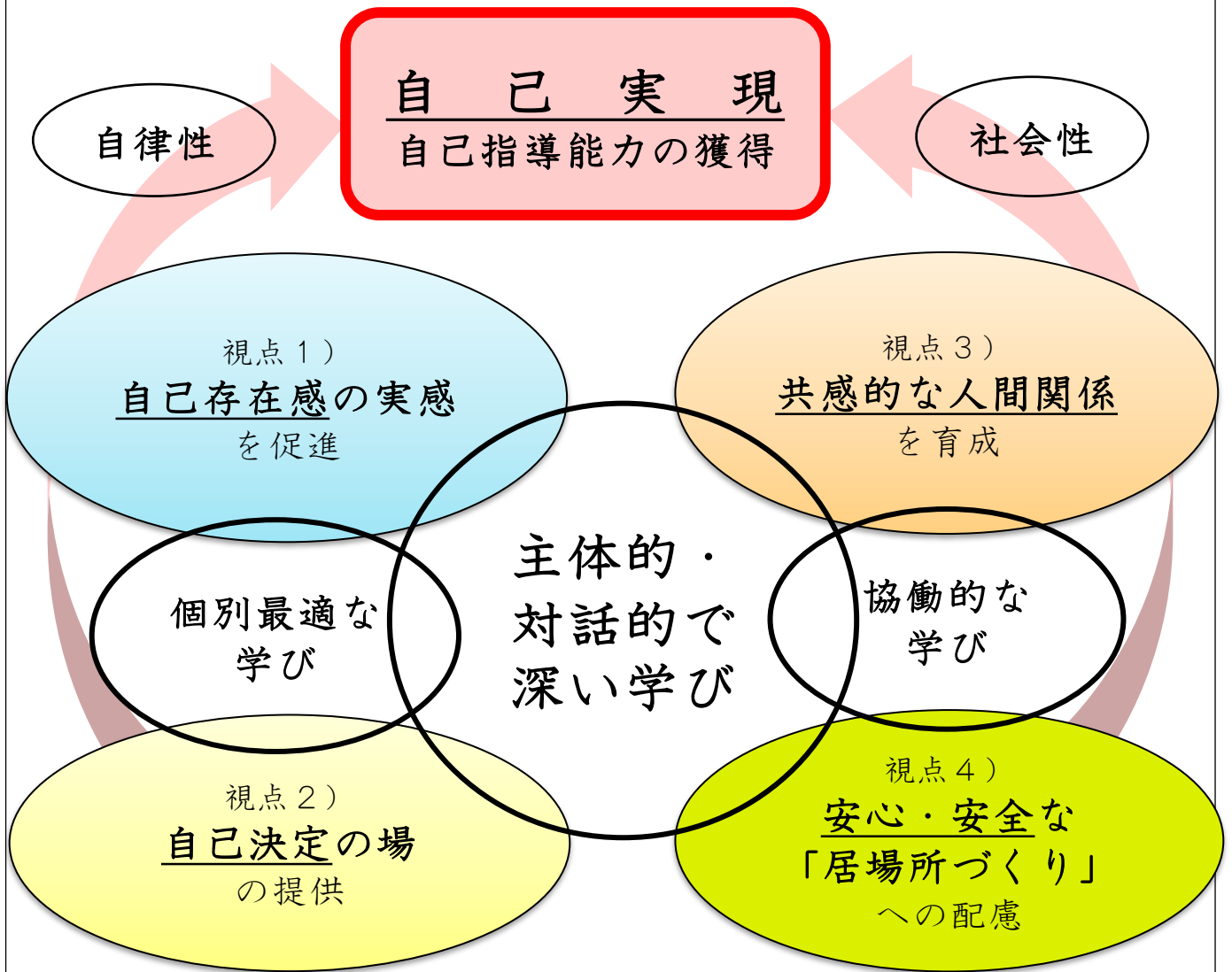
学習指導においては、子どもの全人的な成長・発達を目指し、学習指導を担う教師が生徒指導の主たる担い手でもある「日本型学校教育」の強みを最大限に発揮することが求められます。



「授業と生徒指導の一体化」を進めるにあたり、どのような視点で実践すればよいのでしょうか？



次の「実践上の4つの視点」を参考に「**授業と生徒指導を一体化させた授業づくり**」を進めましょう。



「授業と生徒指導の一体化」を進める際の基盤

- 個に応じた指導の充実
学習状況の把握・発達上の理由・友人関係等の影響
- 児童生徒理解
授業観察と主観的情報の収集
チームによる分析と対応の共通理解



自己存在感の実感を促進

自己肯定感や自己有用感の涵養
“自分も一人の人間として大切にされている”

「どの児童生徒も分かる授業」
「どの児童生徒にとっても面白い授業」の実践

「個別最適な学び」の実現

子どもが自己調整しながら学習を進めていく。

（「〇〇について考えていこう」「この方法で進めよう」「この見通しでやっていけそうだ」等）一人一人の理解状況や能力・適性に合わせた個別最適な学びを通して、多様な子どもたちが誰一人取り残されることがないようにする。

◆指導の個別化

～特性・進度・到達度等に応じて 主に習得・活用～

- ・同じ目標を全ての子どもが達成することを目指し、異なる方法等で学習を進める
- ・指導方法・教材・学習時間等を柔軟に設定する

☆自分ができると分かる問題を自分のペースで解く個別化は、他者との比較による焦りや不安等が軽減され、教室にいる安心感や課題に対する達成感へつながる。

◆学習の個性化 ～興味・関心に応じて 主に探究～

- ・異なる目標に向けて、学習を広げ、深める
- ・子ども一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供する

☆課題に対して自分の強みを生かしながら学習することを通して、自分の得意なことを生かした、自分の興味のあることが認められた、という自己有用感につながる。

自己決定の場の提供

「自ら考え、選択し、決定する力」の育成
“自分の力で考えて、決めて、頑張ることができた”

「児童生徒の学びを促進する授業」の実践

◆授業場面での例

- ・意見発表したり、子ども同士で対話、議論する場の設定
- ・協力して調べ学習、実験、発表、作品づくり等の活動の実践

共感的な人間関係を育成

互いに認め合い・励まし合い・支え合える学習集団づくり

児童生徒同士が互いに関心を抱き合う授業の実践

◆授業場面での例

- ・自分の得意なところを発表し合う機会の提供
- ・発表等で間違ったり、できなかつたりしても笑われない、失敗を恐れずに挑戦できる学級風土

☆教師が、多様な個性を尊重し、相手の立場になって考え行動する姿勢を率先して示す。間違いや不適切な言動への対応は子どものロールモデルになる。

「協働的な学び」の実現

「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、子ども同士、あるいは他者との協働を通して、互いを尊重しながら、必要な資質・能力を育成する。

また、集団の中で個が埋没することのないよう、一人一人のよい点や可能性を生かし、異なる考えであっても組み合わせると、よりよい考えが生み出されることを実感できるような場面を設定する。

- 例) 「○○さんと○○さんの意見は似ているね」
「○○さんの意見につけたすと…」
「□□だったら、こんなことができそうだ」等

安心・安全な「居場所づくり」への配慮

子どもの個性が尊重され、安全かつ安心して学習できる場

学級（ホームルーム）が、どの児童生徒にとっても
落ち着いて過ごせる「（心の）居場所」となっているか

◆取組の例

- ・課題を抱える子どもに寄り添ったり、相談にのったりする
- ・間違ったり失敗したりしても笑われない学級風土づくり
- ・人間関係の構築を目指すエクササイズやトレーニング

☆取組によって、自然に「絆」が生まれたり「自律性」や「社会性」が育まれたりするわけではない。自発的な思いや行動が湧き起こるような働き掛けが不可欠。

☆教師の役割は、子どもが主体的に「絆づくり」ができる「場」や「機会」を提供すること。

～生徒指導は教育活動全体を通して行われます～[★]



■特別活動と生徒指導

- 特別活動は、集団活動を通して、「児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支える」という生徒指導の目的に直接迫る学習活動と言える。
- 「いじめ」や「不登校」等の未然防止も視野に入れ、児童生徒が互いに尊重し、可能性やよさを発揮する等、よりよく成長し合えるような集団活動を展開するよう努める。

■道徳教育と生徒指導

- 道徳教育は生徒指導と「相互補完関係」にある。道徳教育で培われた道徳性を、「生きる力」として日常の生活場面で具現化できるように支援することが生徒指導の働きである。また、生徒指導上の課題に児童生徒が主体的に対処できる力を育む基盤となるのが道徳教育で育まれた道徳性である。

■総合的な学習と生徒指導

- 探究のプロセス（①課題設定→②情報収集→③整理・分析→④まとめ・表現）に沿った学習活動が、児童・生徒の主体的な選択・決定を促す「自己指導能力」の育成につながる。
- 他者との交流や協働を通して、学習活動が発展したり、自分とは異なる見方・考え方があることに気付いたり、また、地域等の大人との交流を通しては、社会参画意識の醸成にもつながる。

参照：「生徒指導提要」文部科学省 2022

「令和の日本型学校教育の構築を目指して（答申）」文部科学省 2021

「これからの児童生徒の発達支持」 八並光俊・石隈利紀 ぎょうせい 2023

「NITS校内研修シリーズ 生徒指導Ⅰ・Ⅱ」独立行政法人教職員支援機構 2023

「生徒指導リーフ2 絆づくりと居場所づくり」国立教育政策研究所 H24

「これからの学習指導—個別最適化・協同・動機づけ—」公益社団法人学校教育開発研究所 2023

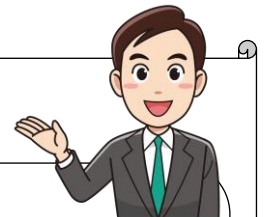
「生徒指導提要进行を現場の目線で読む 第2章」東洋館出版社 2023 <https://www.toyokan.co.jp/blogs/student-guide>

2 集団づくりの視点 ～ 支持的風土の醸成 ～

学校生活において多くの時間を過ごす学級は、学校生活における学習環境そのものであり、生活環境そのものでもあります。全ての児童生徒が安心して自分らしさを発揮し、自分の可能性を追求できる集団づくりを目指しましょう。



「支持的風土」づくりで大切なことは何ですか？



支持的風土とは

「認め合い、助け合い、期待をかけ合い、高め合う
温かい学級の風土」
のことを言います。

「傾聴・受容」「支援」「自律」は支持的風土に向かうための筋道でもあります。

自立に向けて、状況を見極めて適切に判断し、行動するなどの「自律」を体現していくには、仲間の「支援」が必要です。仲間を「支援」していくには、相手の考えや思いを「受容」していく必要があります。「受容」するためには、「傾聴」し、相手の考えや思いに共感することが欠かせません。

（支持的風土だより「テロワール」（学校支援課 2019）より）

傾聴・受容

- ◆相手を理解するために、積極的に関心をもって注意深く聴くこと。
- ◆言語メッセージだけでなく、非言語メッセージ（表情・しぐさ・声の調子等）から、言葉の背後にある感情を受け止めて共感することが大切。
- ◆傾聴を行うことで、引き出された相手の気持ちや考えを尊重し、相手が安心感を得ること。
- ◆聞き手がそのまま受け止める態度や姿勢を示すことが大切。

支援

- ◆相手の立場や状況、気持ちに応じた援助をし、相手に自信をもたせること（手を差し伸べる、時には見守る等、相手の身になって援助することに心掛けることが大切）。
- ◆相手が困っている時には、誰かれなく進んで手を差し伸べること。

自律

- ◆事実を基に的確に状況を捉え、自分の目標、集団に共有されている価値に照らして適切に判断し、行動できること。また、自分の行動に責任をもつこと。
- ◆自分の行動を振り返り、今後どうすべきか考えること。

～ 支持的風土の理念 をもう少し詳しく～



傾聴・受容

～ 「聴くことに始まり聴くことに終わる」 ～

話を聴くことは人間関係づくりにおいても重要です。

「良い悪い」は一旦横に置いて、**まず相手（子ども）の話に耳を**傾けましょう。自分の話をしっかり聴いてもらったり、聴いてくれたりする教師の姿を見た子どもは、徐々に聴き手として育っていきます。

「どの子どもも温かく丸ごと受入れ、平等に機会を与え、言動に寄り添い、支援し期待をかけ、達成感をもたせる」ことを大切にしましょう。

また、協働の場面など、相互に関わり合うことを大切にした学習を進めるには、子どもたちの聴き手としての傾聴態度がその学習の成功要因の一つとなります。

言語で伝わるメッセージは約7%、
非言語で伝わるメッセージが約93%と言われます。
両方のメッセージを聴きましょう。

「言語から伝わるメッセージを聴く」
「非言語を観察して聴く」

支援

「支持的風土づくり」のためには、教師が子どもを支援することは当然ですが、それだけでは十分ではありません。大切なのは、子ども同士が支援的な関係を結べるかどうかにあります。子ども同士が支援的な関係にある学級とは、次のような学級です。

子ども同士が支援的な関係にある学級の姿とは

- “一人残らず学級の全員がゴールする” ことを学級の全員が目標にしている学級

“一人残らず学級の全員がゴールする”とは、同時に全員がゴールすることではありません。自分さえできればよい、分かればよいというのではなく、学級の仲間全員がゴールを目指すのだという心構えを大切にすることです。このことを全員が共通理解している学級は、どんな場合でも、その時々で困っている仲間のことを考え、行動することを大切にしている学級です。

- 自分は誰からもいつでも助けてもらえる、自分から遠慮なく誰に対しても常に助けを求められるという安心感がある学級

助けを求める側には、常に断られたらどうしようという不安があります。そんな心配のいらぬ「相手は決して断らない、必ず教えてくれる」という信頼関係で結ばれている学級です。

- どの子どもにも必ず出番がある学級

出番の少ない仲間にはみんなで出番を譲ったり、作ったりし合える学級です。失敗しても恥ずかしくない、むしろ、みんなが応援してくれるという確信があれば、どの子どもも安心して挑戦できます。

「支援」は、基本的には、相手が困ったり、分からなかった時に助けたり、教えたりすることですが、そこで大事なことは、あくまでも“一緒に学ぶ”という姿勢で「支援」すること、相手の“一人立ち”を目指した「支援」であることが重要です。

自律

「自律」は、社会人として大事な“状況を見極めて適切に判断し、自ら実践する”ことを目指しています。状況を見極めて適切に判断し、自ら実践する力の育成を見据えて、学級としての「自律」、個人としての「自律」を目指した支持的風土を醸成していくことが重要です。

【自治的な学級集団とは】

集団生活に必要な規律やルールを自分たちで決め、それを進んで守り、自分たちの問題や課題は、自分たちの力で知恵を出し合いながら仲間と共に解決しようとしていく集団。

自律した学級集団の姿

規律やルールを他律的なペナルティを伴って守らせるのではなく、時間がかかってもその規律やルールの意味を理解し、自分たちで働き掛けながら進んで守っていきこうとする学級。

指導の方向性

自分たちの活動目標を決め、その成果を自分たちで評価しながら前へ進んでいくPDCAサイクルを学級として機能させている学級。

教師の構え

- 規則やルールは、罰則を伴って守らせるものではなく、「互いに気持ちよく学習や活動をするためにみんなで守ろう」という姿勢を育てる。
- 不正には厳しい態度で臨み、学級では「正しいことを正しいこととして、遠慮なく言って実践しよう」という気持ちを育てる。
- 「自分の学級が大好きだ」「自分の学級が誇らしい」という思いを、誰もがもてることを目指す。

個人としての「自律」に必要なこと

自分の状況を正確に自己観察し、修正する力を付けること

この力を付けるには、①～⑥の過程を、子どもに意図的に経験させることがポイントです。授業や学級活動、学校行事等での振り返りや、キャリア・パスポートを有効に活用しましょう。

そして、子どもが自分で意識して行うことができるようにしていきます。

- ① 集団の目標を踏まえたうえで、自分の目標を立てる。
同時に評価項目も一緒に設定する。
- ② 目標を達成するための有効な手立てを考え、決める。
- ③ 達成のための実践、努力を主体的に行う。
他との連携が必要な時には自分から求める。
- ④ 活動の終了時（長いスパンの時には中間）や一定の期間が過ぎたら自己評価を行う。
- ⑤ 評価結果に基づき、振り返りを行う。
- ⑥ 振り返りを次の活動に生かし、振り返りを基に新たな活動目標を立てていく。

＜振り返りの観点の例＞

- 何が効果的だったか。それはなぜか。
- 何がうまくいかなかったか。それはなぜか。
- もし、また同じことをやるとしたら何を変えるか。
- この考え方は、どんな時に使えそうか。

「自律」の心を育てるためには、「自己を見つめ、振り返る」時間や機会が必要です。そのためには“書く”という行為がとても重要です。なぜなら、“書く”ということは“考える”ということであり、“書く”という行為を通して、自己との対話を深め、より深く自己を見つめることができるからです。“書く”ことは、「自律」の心を育てるために欠かせないものです。

子どもが書いたものに対し、教師が感想やアドバイスを送ることも、子どもの「自律」の心を磨いていくために極めて有効です。